愛のあけぼの

三浦朱門
曾野綾子
遠藤周作

読売新聞社

愛のあけぼの

三浦朱門
曾野綾子
遠藤周作

読売新聞社

愛のあけぼの――――九〇〇円

著者――三浦朱門
曾野綾子
遠藤周作

編集人――酒井堅次

発行人――二宮信親

発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町七七　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所――明和印刷株式会社

製本所――豊文社

第一刷――昭和五十一年六月二十日

© 三浦朱門、曾野綾子、遠藤周作　昭和五十一年

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0095—702050—8715
Printed in Japan

愛のあけぼの

目　次

三浦朱門……7
夕焼け8　海水浴10　選ばれた者12　物を作り出す力14　勉強16　戦争反対18　思い出20　天気予報22　腕力24　道26　恵まれた男28　自動車30　愛玩動物32　落第生34　進歩と改良36　写真38　花壇40　知識42　金紙の星44　妥協46　健康48　冬の夜50　奥さま大学生52　反省54　野球56　心臓58　先祖60　受験勉強62　若葉64　歴史の英雄たち66　眠れぬ夜68　財産70　鹿の鳴き声72　朝の心と夜の心74　昭和の子供76　林間学校78　書親と子82　欲ばり84　親切86　焔を見る88　理想的人間像90　崖の上の土地92　試験94　昔の人96　真相98　人間の誇り100　一方通行102　枯木体と心の死106　文明と公害108　大都会110　ババ抜き112　悲しいピエロ114　寺の鐘116

曾野綾子……119
静かに生きる120　読者からの手紙122　娘の結婚124　キャベツ畑126　先生の顔128　祈り130　知ることと愛すること132　近視134　自動電話136　服を作る138　踏絵140　三人のおばあさん142　飛行機に乗る144　本当のトク146　忘れたい話148　勝利者と敗者150　愛のかたち152　らっきょうの花154　永遠の前の一瞬156　羞恥心158　信頼160　食前の祈り162　本の読み方164　不幸を迎えうつこと166　別れ168　母の若い日170　子供とおこづかい172　北陸トンネル174　理想の家庭176　犬の尻尾178　春のおそい村で180　非売品182　お嬢さん学校184

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

野良猫「マメ」186　白い杖188　作業中190　たてまえ192　ないよりはましな話194　新しい農村生活者196　海辺の家198　ワイロ200　交通事故202　自分の言葉204　アメリカ通信（中世部の小さな町で）206　急行券208　気重さと安心と210　健康ひまなし212　末広がりのおもち214　未熟な母と子216　ひとに迷惑をかけて218　名を残さずに220　白い金魚222

遠藤周作 …… 225

ペン軸の話226　苦しみについて1 228　苦しみについて2 230　鳥たちの眼232　小説家という仕事234　犬と猫236　失礼と有難う238　踏絵の話240　ワタクシという一人称242　散髪屋の鏡244　河と駅と坂路246　本の話1 248　本の話2 250　まず微笑252　短気をなおす法254　癩院での話1 256　癩院での話2 258　好きな言葉260　一つの罪262　東京264　秩序について266　すみませんが268　思いやり270　うちの息子272　大木274　変な犬276　例の風邪薬から278　戦争の一つの古傷280　人生における謎282　謎から問へ284　男らしさについて286　ふたたび男らしさについて288　顔290　日常の権力意識292　イロリばた294　疑問296　墓地での回想298　白い木蓮300　息子の教育302　春の花304　縁談306　学者308　二つの裁判310　はなたれ小僧312　幼なじみ314　太陽のほほえみ316

あとがき …… 318

装丁　菊池　薫

愛のあけぼの

三浦朱門

夕焼け

十代のころの私は、夜おそくまで起きて、読書をしたり勉強したりするのが好きだった。終電車もなくなった頃、ただ一人で起きていると、一種の誇りをおぼえた。世の中のヤツは皆ねむっている。しかし私一人おきて勉強している。その時、私は眠っているうさぎのそばを追いこしてゆく亀になったように思ったものであった。

それはただ一人で山の頂上にいる満足感と似ていないこともなかったが、淋しいことでもあった。私がそのように努力し、苦しみと戦っていることを、知っていて、はげまし賞讃してくれる人がほしかった。「できれば美しい女性がいて、ただ一人眠気と戦っている私を尊敬してくれたら、死んでも構わない」とさえ、思ったことがある。

しかし、ある晩、今ごろ起きて勉強しているのが、私一人でないことに思い当った。ほかにも同じ境遇の受験生がいることを思い出したのではない。私がいる場所が真夜中なら、地球のどこかは朝であり、別の場所は正午である。従って、私がたった一人、頑張って勉強していると思っている瞬間に、地球上の別の国では、数百万の小学生が教室で先生から掛け算を習っており、別の国では、昼食のすんだ大学生が化学の実験

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

をやっている計算になる。

そう思った時、私の小さな自己満足は消えてしまった。わずかに、三時間、おそくまで起きて勉強して、高い山の頂きに登ったような気持になるなんて、いい気なものだと思った。

そして、地球上のどこかの海や平原に、今頃ちょうど、夕方が訪れているはずだと思った。そしてそこの空にはブドー酒をぶちまけたような、ケンランたる夕焼けがあるにちがいないと思った。大空を焼きつくすような壮麗な夕焼けは、それを見る人がいようといまいと、やがて、星空に変ってゆく。人の目の届かない所にも、そういう夕焼けを用意しておく偉大なものの存在を、私はその時はじめておそろしいと思った。

海水浴

私は真夏の海辺のにぎわいが好きだ。

強い日射しの下で、若い人たちが何千、何万と、泳ぎ、うたい、とび上り、走っている。彼らがあまり元気なので、私などは彼らになぐりたおされそうで、おそろしく思うこともある。

それでもなお、私は海岸の若い人々が好きだ。そこには生命力というか、人間のエネルギーが満ちあふれているからだ。しかし集団としての命のエネルギーはどんなに強くとも、一人一人の力はもろいから、昨年、大声で歌っていた何人かの少女は、今年はもう浜辺にはこない。そしてあれほど力強く水を蹴っていた青年の何人かは、もう土にかえっている。いや、こういう私だって、今度の夏の海辺を見ることができるという保証はないのだ。

何人かの青年や少女が死んでも、新らしく、生き生きした人々が現れて、その空白を埋めるから、今年の夏も、海辺は若い人々であふれかえるであろう。このような人の命のむなしさのゆえに、私たちの先祖は生きていることを、仮の形として考えるようになった。

出家とか隠居、浮世をすてる、という言葉は、こういう現世のむなし

さに絶望した結果であろう。仕事や、激しい人生の争いから、身をひくことによって、自己の生活の一部を葬ることが、隠居であった。風流人が浮世をすてる時、彼は一種の死を経験したのである。

しかし、最近の小説や映画に、ガンなどで死を宣告された人が、残り少ない命を精一杯生きるというテーマが現れだした。昔のように世をはかなんで、死ぬ準備にとりかかるようなことはしないのである。これは正しいことである。生きている限りは、人は精一杯生きるべきだと私は思う。しかしそれだけに、どういう生き方が、最も価値があるかが、重要な問題になってくる。死を宣告されているのは、別にガンの患者とは限らないのだ。

選ばれた者

エリートという言葉がある。不愉快な言葉だが、選ばれた者、という意味だそうだ。

この言葉は普通、難かしい試験を突破した一流の大学や有名な会社に入った人々のことをさすようだが、果して彼等を選ばれた人間と呼ぶことができるだろうか。

確かに沢山の志願者の中から選りぬかれたという意味では、選ばれた、という意味にとることができるが、世の中にはもっと別の選び方がある。

愛情深い母親は、地震がグラッときただけで、まず子供を抱きあげるであろう。彼女にとって、指環より、貯金通帳よりも子供が大切なのだ。いや、ほかの物に較べて、子供が大切、というようなことではない。比較する以前において、子供のことが頭の中にひらめくのである。そして子供がどんなに悪い人間になっても、母親は最後まで子供の味方である。つまり、私たちは、うまれながらにして、母親から選ばれた人間なのだ。

学校や会社は、試験によって、私を選び出しても、その後の成績が悪

かったら、失敗があれば、私を追い出してしまうであろう。つまり彼等は私を選んだ訳ではない。「その場所に当てはまるかどうか、私をためしただけなのだ」

試験という言葉の意味はためすことだ。従って、試験に通った者は、最後までためされつづけている。だからエリートと言われる人々の多くは、いらいらと落ちつきがなく、選ばれた者という言葉から想像される豊かさや温かさがないのである。

試験勉強をし、それに通ろうとすることは悪いことではない。しかし試験に合格したからと言って、選ばれた人間と思うことは誤りである。選び、選ばれるということは、深い愛情の裏付けがあって、はじめて成立することで、試験に落ちても、エリート、つまり選ばれた人になることができる。つまり愛情のあふれた家庭を作ることができれば、その人はもう選ばれた人ということができる。

物を作り出す力

私の息子は親や祖父母がかまいすぎたせいか、物事に対して消極的である。何かしよう、何かたべよう、と言うと、それが今まで経験したものでないと、「いや」と言う。珍らしい物に対する好奇心がないではないのだが、それよりも、自分の責任において、未知の問題を解決するのが厭であるらしい。

私は息子の教育を誤ったようだ。時間のムダをさけようとして、要領よく物ごとを教えたのは、間違いであった。私は意識的にそうしたのではないが、大人たちの間に、子供が一人だけまじっていると、子供の行動が極めて非能率的に見えるから、つい大人が手伝ってしまったり、答を与えてしまうことになりがちである。

その結果私の息子は、失敗を知らない、というよりも、失敗を恐れる子供になってしまった。珍らしい問題を目の前にすると、それを解決する糸口を見つけるのがわずらわしく思うらしい。これは精神的な怠け者である。

自分の息子から、よそさまの息子をおしはかるのは失礼かもしれないが、近頃の子供たちは一般に、そういう傾向が強いのではないだろう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com